



小さな若葉に、大きな愛情を注いで

和食の薬味として欠かせない木の芽。

主に山椒の若葉を指し、料理に香りを添え、彩りを引き立てる。

旬は春先だが、これを通年栽培しているのが

J A おうみ富士の吉川木の芽会だ。

産地の灯を絶やすまいと、4軒の農家が協力しあつている。

始まりは40年前
近畿でも指折りの産地へ

琵琶湖から吹く冷涼な風が、秋の訪れを告げている。10月初旬、夕暮れ時に吉川木の芽会を訪ねた。集荷場の一角には、出荷前の木箱が整然と並んでいる。杉皮の蓋をめくると、みずみずしい木の芽が行儀よく収まっていた。「これは明朝の競りに並びます。一箱におよそ10枚、乾燥は大敵です」と話すのは、吉川木の芽会の山本昌志さん。出荷は京都と大阪の市場。競りで落札されるため、日ごとに価格が異なる。「日によっては、価格に10倍ほどの開きがあることも。タケノコや鰻の

料理によく使われるため、春先や夏に需要が高まります」と山本さんは続ける。

野洲市吉川で木の芽の栽培が始まつたのは、40年ほど前。主産地の愛知県から苗と栽培法を取り入れ、少しずつ出荷するようになつた。最盛期には、農家7軒、一日あたり計1000箱に達したが、現在は4軒で計100～200箱を出荷している。「まとめた量を供給できなければ、市場から相手にしてもらえない」。気候に左右されますが、栽培はなかなか難しいものです」と、隣にいた辻良作さんは話す。

この時期、木の芽は料亭やホテルで提供される高級和食に添えられる



吉川木の芽会の皆さん

吉川木の芽会の皆さん。最盛期には7軒あったが、現在は4軒が木の芽を栽培する。左列から、吉川耕治さん（手前）、辻良作さん（奥）、中列は辻重男さん（手前）、山本昌志さん（奥）、右列は辻とみ江さん（手前）、辻智子さん（中）、山本直美さん（奥）



① 苗場には、およそ5万本が植えられている。葉が落ちたものを貯蔵庫に寝かせるが、保管は1年が限度。それを過ぎると根付きが悪くなる。② ビニールハウス（室）の内部。右列は収穫済み、左列はこれから収穫されるため、シートで保護してある。③ 伏せ込みされた苗木から一枚一枚を収穫する。若葉を一通り摘み取った木は廃棄する。

ことが多い。通年で栽培している产地は、滋賀県内では吉川のみ、近畿でも数えるほどしかないという。手塙にかけた苗木が翌年の収穫を左右する

山本さんの後について、苗場に向かふ。背丈30～50センチの若木が、畝に沿つて凜と葉を茂らせる。

木の芽栽培は、3月の種まきから始まる。実生した苗木を5月中旬に露地へ移植し、翌年の1月から2月

に掘り起こして、大型の貯蔵用冷蔵庫で保存する。昔は愛知県内の貯蔵施設まで苗木を運搬していたが、現在は大津市内にあるほか、一部の生産者は自宅に小規模の貯蔵庫を備えている。

「苗木の栽培の成否が、翌年の収入を左右します。うちちは昨年に全滅したので、今年は苗木を分けてもらつて、なんとか収穫できている状況です。それでは生活が成り立ちませんから、空いた時間に野菜を栽培し、

収入の足しにしています」と辻さん。その横から山本さんが、「うちちは一昨年に全滅しました」と教えてくれた。

苗木が枯れる理由は、はつきりと分かつていらない。枯れる時は、葉や枝が赤茶色に変色して立ち枯れた後、

枝が赤茶色に変色して立ち枯れた後、

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝

枝